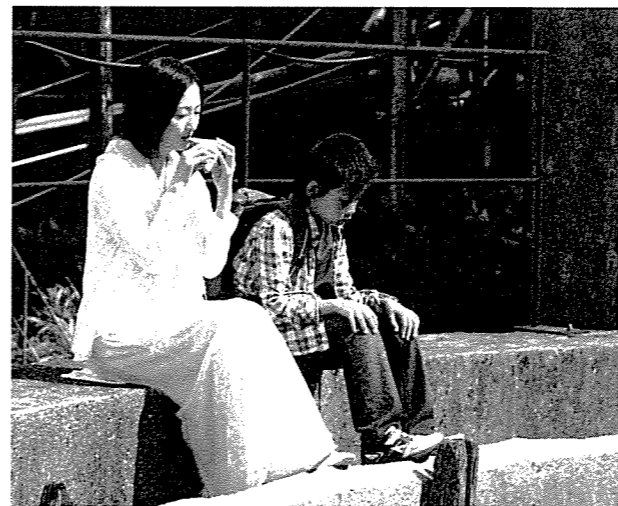


母なる島・池島 映画『池島譚歌』

監督・脚本 萩野欣士郎

長崎市池島町で撮影する。そう言うと、「なぜ池島なんですか?」と必ず聞かれます。その理由はすごく簡単で、炭鉱の町を探していたからです。前に原子力を題材にした作品を作りましたが、原子力問題はまだ解決していません。そこでわたしはまず、もう一度日本をエネルギー革命の時代から見直してみたいと思いました。そうして調べていくうちに行きついたのが池島という炭鉱の島でした。わたしたちは長崎という土地でいろいろ活動をさせてもらうなかで、多くの人たちと関わらせていただきました。そして長崎の持つ考え方は今の日本にいちばん必要なものではないかと感じました。長崎では、いろんな文化が交じりあって、一つの文化を形成しています。それは結局、他人を受け入れていくことだと思っています。また池島では、「一山一家」という考え方があります。それは山で働く人すべてが家族であるという考え方です。この池島には、現在の私たちが忘れつつある人と人とのつながり、自然体のコミュニケーションが残っているのです。日本では今、ニートや教育などいろいろな問題を抱えています。それが意味するのは、悲しいこと

ですが、他人を受け入れられない時代になってしまっているからだと私は考えます。今の日本に必要なものは、この池島炭鉱に伝わる「一山一家」の精神ではないかと思っています。『池島譚歌』のテーマは親子の絆です。映画の中の主人公の男の子が、半年前から帰ってこない母親を探すため、仲間たちと共に池島中を冒険し、幾多の障害、葛藤を乗り越え、家族の素晴らしさ、人の思いやりの大切さを伝えていきます。池島の全景写真を見たときには、ここは母なる島だと感じました。池があり、そこが港となった……水が羊水であり子供が生まれてくるような出産のイメージが浮かんだのです。現在、親子の関係がうまくなくなってない家庭が多くあります。生まれる意味をこの母なる島・池島で描きたいと思いました。海が生命の誕生の場所ならば、大村湾を抱きしめるような形の長崎県は父親が家庭を守り育てている様子だと思いました。哀しいことですが、今の子供たちに将来の夢を聞くと、ほとんどが公務員と答えるそうです。昔は、パイロットや宇宙飛行士がふつうでした。



なぜこんなことになってしまったのかというと、大人が夢を語るなくなったからだ。わたしは思います。また引きこもりなど、今の日本はコミュニケーション不足による問題が多くあります。他人と手を取り合うことで新しい世界が広がることを、様々な文化が混ざり合った長崎は伝えてくれる……長崎が日本のこれからを照らしていく灯火だと思いました。今、日本が必要としているのは長崎県、長崎市、池島にあります。さらにこの映画のラストシーンでは、「一キロメートルレール移動撮影」というギネス世界記録に



挑戦します。長崎からギネスに挑戦し、世界一を達成することで、今の子供たちに「夢」を実現させる本気の姿を見せたいと思っています。「夢」を持つことの大切さ、夢を実現する素晴らしさを伝えられたらと思っています。レール移動撮影とは、地面にレールを敷き、その上にカメラを乗せた台車を置いて移動しながら撮影する、という手法です。これは炭鉱時代の石炭を運搬するトロッコ列車から着想を得ました。炭鉱のあいさつは「ご安全に」でした。それは炭鉱の仕事がとても危険だったことを意味しています。炭鉱夫たちは毎

日死と隣り合わせのなか、家族に送り出され、また帰ってくると子供たちは喜んで飛びついたそうです。暗く長い炭鉱の中を進むレールにはそういった家族をつなぐ想いがあると感じました。日本語で「帰路」……帰る路、「岐路」……分かれ路、という二つの意味を含んでいます。この『池島譚歌』という映画は、日本が忘れつつある、人と人がつながっていた時代を思い出し、帰ろうとする帰路。そして、このレール撮影では、この先の子供たちが夢を持つことができるかどうかの分かれ道という意味での「岐路」にできればと考えています。この映画のラストシーンの一キロのレールには、十メートルで一歳、一キロ(百歳)という意味を持たせて、レールを人生、生きてきた道という解釈を持たせています。主人公が自分の人生を振り返り、またその先の人生を創造するなかで、レールとレールがつながるように、わたしたちは他の人と関わり繋がり生きていき、次の世代にバトンを渡す、未来に何かを残しつつながっていきたいというメッセージが込められています。たとえば、年間に日本で自殺する人間は三万人にのぼります。それだけ次につなぐバトンを失っ

ているということですが、またわたしたちは長崎に強くこだわっています。『池島譚歌』に出演する子供たちも長崎の子どもたちに出演してもらっています。長崎の物産も多くあります。しかし、わたしたちは長崎の人たちから見れば、東京から来た「よそ者」です。やはりこの映画は、「よそ者」が池島に来て映画を撮ったのでは違うと思います。わたしたちが長崎の人たちと交流して、長崎の人たちとなつて、そして内側から撮っているかなくてはならないと思っています。それは長崎と



いう土地を、この映画を通して広げていきたいからです。映画というのは、時代を超えるだけでなく、観光などにもつながる要素にもなると思います。長崎に貢献してはじめて、わたしたちがこの映画を撮る理由になるのではないかと、そう考えています。最終的には、長崎の人たちが「俺たちが萩野に映画を撮らしてやった」と言ってもらって、成立するのではないかとわたしは思っています。池島の撮影は順調です。わたしたちもどんどん池島が好きになっていきます。その中でわたしたちが経験しているすばらしいものを、多くの人々に伝えるのがわたしたちの仕事であり、それができるように残りの数日間を頑張っていきたいと思っています。



萩野欣士郎監督プロフィール

昭和45年5月3日生まれ
映画監督/脚本家/マンガ原作者
日本映画監督協会会員
東放学園映画専門学校非常勤講師
映画チームフィルムフロンティア主宰